令和７年度　教育研究所　班別研究

「道徳授業改善プロジェクトチーム」

Ⅰ　研究テーマ

道徳的価値について、自分自身との関わりで考え、話し合う道徳授業の実践

～発達段階に応じた主発問と補助発問の精選を通して～

Ⅱ　研究の目的

道徳の授業において、児童生徒一人一人が道徳的価値について多面的・多角的に考え、自分との関わりの中で理解を深め、「考えたくなる、話したくなる」場面設定をした授業実践、評価の視点の設定を通して、自分事として捉え、道徳意識を高められる取組を提案する。

Ⅲ　研究内容

１　「Ａ教諭の実践」

（１）　実践内容

Ａ教諭は、資料「セルフジャッジ」を用いて、**道徳の授業改善の実践を行った。**

①　考えどころの決定

資料の挿絵を利用

きまりがあるにもかかわらず、守ることができなかった。その結果、楽しいはずのサッカーがおもしろくなくなってしまった。きまりは守るもの、ルールを守ると楽しいと児童は知っているはずなので、ゆさぶりとして「なぜきまりを守れなかったのか？」を考えどころとした。

②　考えたくなる、話したくなる発問の精選

発問１「どうして、やりたい放題の
になってしまったのでしょうか？

発問２「どうして、ぼくと高志君はやり
放題になってしまったのでしょうか

発問１・２

発問１は、全体に問いかけた。児童の言葉を拾いながらすすめ、「ぼくと高志君が最初にルールを破り始めた」ことを押さえた。児童の発言から次の発問を作り、発問２では、個人の考えを持たせてから小人数グループでの、「ズルをしても注意する人がいなかった」→「だから調子にのった」や、「自分の欲だけ」な善悪の判断や人間の心の弱さについても着目することができた。

③　構造的な板書

授業の構造を意識した板書

グループで考えを深められるように板書を振り返りながら問い返しをした。「スポーツマンシップ」や「みんなの気持ちを考えながらやる」といった意見が出てきて、最後は「きまりはみんなが楽しい思いをするためにある」と基礎の尊重の価値を高めることができた。

④　評価につながる自分事としての振り返り

自分事としての振り返り

教科書を離れ、日常生活の中の自分をセルフジャッジをしなければならない場面」を挙げさせ、自分事としての振り返りを行い、振り返ることができるようにした。

（２）　成果と課題

成果

○ゆさぶりや問い返しの発問をすることで、児童の思考を深めることにつながった。

○自分事としての振り返りを行う際、教科書を離れることで、日常生活に直結した考えを持ち、改善しようという意欲を高めることができた。児童自身の言動や思考に変容がみられた。

課題

●「考えたくなる・話したくなる」ための、より複雑な発問や、価値をゆさぶるための発問の精選が必要とされる。

２　「Ｂ教諭の実践」

（１）　実践内容

Ｂ教諭は、資料「小さなできごと」を用いて、道徳の授業改善の実践を行った。

①　考えどころの決定

授業内で考えさせたい道徳的価値とは別の価値項目へ話合いがずれてしまうことがあることが課題であったので、「ごめんなさいと言えたのはどうしてか」を考えどころとして、資料の中の「人物・もの・行動」とその背景や意味を押さえた。

②　交流（話したくなる場づくりとして）

交流場面

交流が「発言の多い児童が中心」になったり、相手が固定化したりすると、安心して話す機会や多様な考えに触れる機会が偏り、考えが深まりにくいことが課題であった。そこで、交流では、まず話したい相手を自分で選んで話し始められるようにし、安心して自分の考えを言語化できる場を作った。また、自分の経験や思いを重ねて話せるようにした。

③　考えたくなる、話したくなる発問の精選

動作化の場面

教科書に書いてあることを探して答えたり、心情の読み取りで止まってしまったりする道徳にならないように動作化を取り入れた。「もし自分だったらどうするか」や、人物の背景・行動の意味・気持ちの変化を考えさせるような発問をし、動作化などで気持ちを実感させ、考えの深まりにつながるようにした

④　評価につながる見取り

話合い中心の授業では、個人の変容が記録として残りにくく、評価につながる見取りが難しいことを常々感じていた。そこで、見取りの工夫としてワークシートの記述を中心に見取り、記入が難しい場合は座席表に「つぶやき」を記録して、個人の思いや変容が残るようにした。

（２）　成果と課題

成果

○「考えどころ」を決定したことにより、授業のねらいとする道徳的価値の焦点化が安定し、話合いが深まった

○動作化や問い返しや揺さぶりの発問を取り入れたことにより、“教科書から探す”から“気持ちを考える”授業へ転換できた

課題

●児童主体の話合いが成立するために、教材の価値（中心）の押さえを十分に行い、自分の考えに自信が持てる手立てを有効に活用していく必要がある。

３　「Ｃ教諭の実践」

（１）　実践内容

Ｃ教諭は、資料「見えない親切」を用いて、道徳の授業改善の実践を行った。

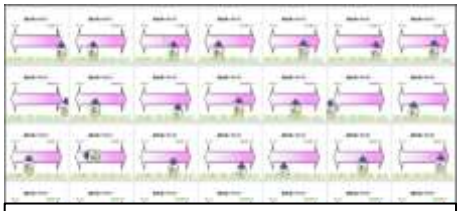
①　考えどころの決定

「考えどころ」として、場面絵を用いた。本時の道徳的価値に迫れるように、場面絵を提示した。「美里の親切」と「若者の親切」にはどのような違いがありますか」と問い、考える時間を十分に確保するようにした。

資料の挿絵を利用

②　考えたくなる・話したくなる発問の精選

「美里の親切は思いやりではないのでしょうか」と、ゆさぶりを意識した発問をした。その後、矢印の位置を動かせるスケールを用いて自分の立ち位置を可視化してからの意見交流の時間をとった。「ありがとうと言われるわけでもないのに、親切にできるか」と人間の弱さについて考えを深められる発問をして、誰かに話したくなることをねらいとした。



スケール

③　構造的な板書

発問に対する生徒の意識を構造的な板書でまとめ、本時の道徳的価値に迫っていけるように、両者の比較を構造的な板書でまとめ、本時の道徳的価値に迫れるようにした。

生徒の思考を意識した板書

④　自分事としての振り返りの時間を確保

普段の生活の中で見られる、道徳的価値との関わりがわかる写真を提示して、自分事として振り返らせた。

給食で使用するゴミ袋の写真

（２）　成果と課題

成果

○任意の相手との意見交流は、生徒自身の「あの子と話したい」という気持ちが入るため対話への抵抗感が弱まり、議論する道徳という観点では効果的であった。

○生徒に考えさせたい部分にフォーカスした発問をすることにより、生徒の中にある道徳的価値についての認識を広げ、深めることができた。

課題

●交流場面を取り入れることで対話が増える分、すべての対話をファシリテートすること(補助発問や切り返しなど)の難しさがあるため、道徳的価値に迫る発問を意識して用意しておく必要がある。

4　「評価についての取組」

評価の大くくりな視点を、児童生徒の発言や記述から３つに分類できるようにした。

①「授業での学びを自分事として捉えていて相手のことまで考えることができる。

例：定型文

・道徳的価値について自分のこととして考え、発信することができました。特に「○○」の学習では「児童生徒の記述、発言を引用」と意欲を高めていました。

②「授業での学びをこれまでの自分の経験と結びつけ、これからの自分について考えている。」

例：定型文

・授業で学んだことをこれからの生活に生かそうと考えていました。特に「○○」の学習では「児童生徒の記述、発言を引用」と「道徳的価値を引用」の大切さに気づいていました。

③「授業での学びについて触れている。」

例：定型文

・授業で学んだことを、自分の生活と結びつけて考えていました。特に「○○」の学習では「児童生徒の記述、発言を引用」と意識をもつことができました。

Ⅳ　道徳授業改善プロジェクトチームの研究の成果と課題

１　研究の成果

○資料の内容や場面絵から捉えた「考えどころ」の決定をしたことで、授業の核が決まり、発問や全体の流れが作りやすくなった。

○考えたくなるポイント・話したくなるポイントを意識した発問により、児童生徒の思考の流れを追いながら、補助発問、問い返し、ゆさぶり発問等で道徳的価値を深めることができた。

○自分事としての振り返りの時間を確保することで、より自分自身との関わりの中で考えることができ、今までの自分と、これからの自分に思いを馳せ、よりよい自己の生き方について考えることができた。

○構造的な板書の工夫は、授業全体を振り返ることができるのに加え、児童生徒が黒板を見ながら思考したり、考えたりする視点を示すのに効果的な役割を果たした

２　研究の課題

●考えたり話したりする経験の積み重ねと言う点で、話合いの仕方という学習方略は必要である。そこで、道徳の授業における話合い活動を、目的を明確にして意識的に取り入れる必要性がある。

●評価についての見取りの方法や記述とのつながりとして、指導と評価の一体化を見通した授業づくりをして取り入れることが大事になってくる。